

I 報 平泉町遺跡群から発掘された織物断片について  
菊地 美知子 (昭和女大短大)

目的 発掘された繊維材料は、その遺跡の年代から製造年代をほぼ推定することができる。これら繊維材料の調査研究は、織物文化の発展過程の一端を解明することに役立つと考える。本報では、岩手県平泉町遺跡群の12世紀後半の柳之御所跡、および志羅山遺跡から発掘された烏帽子の断片3点と漆こし布の断片2点について(\*1)、繊維の種類、並びに織物の構造を明らかにし、この年代における平泉町地域の織物文化の一端を考察する。

方法 繊維の断面、側面の形態観察は、走査型電子顕微鏡JSM5310型で行い、また赤外分光光度計IR810で赤外線吸収スペクトルを測定した。織物の構造因子については、JIS-L1096一般織物試験方法に準じ、ハイパーマイクロスコープVH6110型、実体顕微鏡SZ40を用い、その画像から測定した。

結果 特記事項は、烏帽子はいずれも繊細な絹織物で、柳之御所跡のものはからみ織組織(\*2)、志羅山遺跡のものは平織組織(平絹)である。漆こし布はいずれも麻類の繊維で、柳之御所跡のものは平織状に組まれており(\*3)、志羅山遺跡のものは編布である。多様化、高級化が進んだ12世紀後半の織物文化の中で、ごく近接した地域でありながら、用途が同じであっても織組織が異なる織物が使用されており、生活に合わせた使い方がされていたものと推測される。

\*1: 岩手県平泉町教育委員会、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターから1992年から1994年に提供された資料 \*2: 岩手県平泉町文化財調査報告書第38集「柳之御所跡発掘調査報告書」 \*3: 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集